

友好と信頼を築いたガネフォ

ガネフォ 団長

頭 山 立 國 (81歳)

(慶応義塾大学出身)

昭和三十八(1963)年十一月、インドネシア国営ガルーダ航空のジェット機処女飛行でガネフォ日本選手団、役員総勢九十六名と共にジャカルタ空港に降り立った。

選手宿舎へと向かう送迎バスに搭乗した折り、まず驚かされたのは、道すがら沿道を埋め尽くしたインドネシア国民の大声援であった。

その数、十数万人と言われていたが、バス走行中の人垣は途切れることなく、「ジャポン!! ジャポン!!」の大合唱で迎えられたことは、誰の心にも焼き付いていると思う。

私の胸の内は「本当に来て良かった。ガネフォに参加して本当に良かった」の思いだけであった。

戦中戦後日本はインドネシア国民軍と共に戦い、戦後日本の残留将兵二千名は、自らの意思で対英蘭軍との独立戦争を戦い、半数の日本将兵が帰らぬ御霊となった。インドネシア国民はそのことを熟知しており、スカルノは壁を乗り越え大会に参加した日本への、最大の感謝の気持ちを挙国一致で顕してくれた証しであった。

当時二十四歳の私に、なぜ参加依頼の要請があったか、そこに至る経緯に少しだけ触れてみたい。

在学中、兄の統一(モトカズ)が、学内に「東南アジア学友会」という文化学生団体を起ち上げた。主旨は、アジアからの留学生の役に立ちたい。初めて訪れた地で、困った時には何でも相談して欲しい。そして日本での留学生活が、実りあると共に心から楽しいものにして帰国して欲しいと願ってのものだった。

昭和三十三(1958)年、兄の卒業を機に代表を引き継いだ。

翌 昭和三十四年、アジア・アフリカ・インドネシア留学生会議スダルソノ代表から、戦後日本の「奇跡の復興」の原動力となった、各企業の現場を目の当たりにしたいという強い要望があり、それに應えるべく政財界のご尽力で、力強い協力を得ることが出来た。

見学は、京浜、関西、北九州の各工業地帯で、東芝、トヨタ、鐘紡、松下電器(現パナソニック)、八幡製鉄(現日本製鉄)その他であった。

総勢約五十名の十五日間にわたる見学会であり、戦後独立した諸国との友好信頼関係の一助になったことは、各関係者 特に北海道炭鉱汽船社長萩原吉太郎氏のご厚意に感謝の念を絶やせない。

また、季節の折々には、湘南海岸での海水浴、筑波山の紅葉見物、箱根の花見会、後樂園遊園地などで楽しいひと時を過ごした。

翌 昭和三十五年、インドネシア全国学生代表会議から、総勢二十名のインドネシア訪問の招待を受けることになった。

ハンガリー政府寄贈の、手洗い付き観光バスの初航行による巡行であった。訪問先は、ジャワの学生たちの案内でインドネシア国立四大学をはじめ、バリ島観光などであった。

以上の経過の中で、双方の信頼関係、友情が構築され、その間駐日インドネシア大使をはじめとする、大使館員とも自然体で相互の信頼が培われた。

昭和三十八(1963)年インドネシアと関係の深い者たち十数人が、先方からの連絡で大使館へ出向いた。

この席でガネフォ開催の趣旨説明と、選手派遣の要請を受け、その結果大会参加の母体が確定した。

選手団結成と選手選考には、体育関係者との繋がりを考慮され、最も年齢の若かった私が適任と判断され団長の任をお受けすることになった。

私には日本がこの要請に答えぬ事があってはならない、の強い思いがあった。

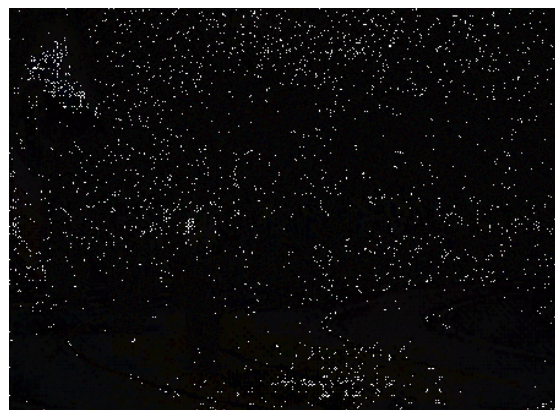
インドネシアは切っても切れない日本の友好国であり、それを棄損する事があってはならない。それに應えるには、翌年に迫った初のアジアでの開催、東京オリンピックとの両立が譲れぬ条件であった。

JOC からその微妙な立場上、積極的な協力を得られぬことは承知していたが、陸連並びに水連は特に厳しいものであった。

従って水球選手の皆さんは、大会参加の「大義」を心から理解され、連盟からの脱会という重大決意をされ馳せ参じて頂いた。

皆さんと縁が結ばれたのは、體育會々員であった中学からの友人原大輔君が、井形敦君に相談してくれたことから始まった。

内容を理解した井形敦君が山本健先輩に事案の内容を説明し、山本氏もその参加の意義を正しく理解、賛同されご協力頂いた。これが菅久、村上(旧姓:本郷)両氏をはじめ、水球選手の皆さん方との五十年を超えるご縁の始まりで



日本選手団 入場

あった。

現地での大会においては、炎天下での待機時間を含む、五時間に及ぶ開会式の日本選手団の態度は見事なものであった。

巨大競技場にあふれんばかりの十万人を超える大観衆の前で、その隊列行進は最後までいっさい乱れることなく実に立派なものであった。

スカルノ大統領の大会宣言をはじめ長時間に及ぶ式典の間、暑さで整列を乱し座り込む多くの他国選手たちの中で、我が日本選手団は整列したまま最後まで起立を保ち続け、その規律正しさは日本選手一人ひとりが、大会参加の大義を実践したことの証しであった。

ペットボトル持参が当たり前となった、現代の医学的見地からの違いはあるにせよ、その精神に大きな開きを憶えるのは、私一人だけではあるまい。

古内広雄駐インドネシア大使は、日本選手団のこの姿勢にいたく胸を打たれ、日本人としての誇りを示せたことに感謝して下さった。同時に各日本企業の現地駐在員の方々からも、選手団への称賛の声が寄せられた。

選手団代表であった私にとってこれ以上誇らしいことはなく、選手の方々の規律を重んじた姿勢に心から感謝した。

各種競技に於ける日本選手団の奮闘。特に銀メダルを獲得した水球チームをはじめ同じくメダルを獲得した柔道、レスリングその他。

古内大使は、ひたむきに戦う日本選手達への慰労と感謝の気持ちを、数回に及ぶ大使館への招待で表して頂いた。

大会中日本国内では、この大会の参加意義の理解にまったく及ばない週刊誌記者が、政商の利権獲得に踊らされたかのような浅はかな記事を掲載した。同じ日本人としてこの捉え方は実に恥ずべきものと思えた。

多くの方々の協力で大会に参加できたことは、両国の親善・友好・信頼に大きな意義があった。その結果インドネシアは、東京五輪への参加意思を固めたが、国際陸連・水連が、ガネフォ出場選手の五輪参加を認めず、インドネシアは残念ながら参加をやむなく辞退した。これは両国にとり非常に残念な事であった。

ガネフォ大会そのものは消滅したが、参加の大義と精神は連綿と息づいている。

インドネシアとの友好関係が継続されてきたことは、日本選手の大会を通じての実践が、両国間の信頼の絆を一層深めたことを矜持として抱き続けて頂きたい。

水球選手の方々が年に一度の懇親会を催され、冊子をも発行されてきたことは選手団を率いた身としてこの上ない慶びである。



水球チーム 入場